

第 56 回(2011. 8. 9 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (4)」

砂漠に雪が降る(気象)

中東は猛烈に暑いところというイメージがある。たしかに、アラビア半島は砂漠が多いから暑いのは確かだが、砂漠にも雪が降ることもある。夜は寒くて薄着でいたら凍え死ぬことさえある。中東には複雑な国境線が存在し、またこの広大な地域にわずか3億人しか住んでいないのは、それは西欧諸国が自分たちの利権のために、今まで暮らして来た人々の意志に関係なく勝手に線引きしてしまった結果でもあるが、国土の大部分が砂漠ないし不毛の大地であり、人が住めない地帯が多いことにも原因がある。世界で有名な砂漠の中でも北アフリカのサハラ砂漠、サウジアラビアのルブアルハリ砂漠、あるいはリビア砂漠、シリア砂漠、サウジアラビアのネフド砂漠など多くの砂漠が中東・アラブの地に存在している。このように、中東は内陸のほとんどが砂漠もしくは土漠と呼ばれる荒野だが、アフガニスタン、イラン、トルコなど中央アジアから中東の東部、東北部にかけては、アルプスやヒマラヤ山脈に続く荒れ果てた山脈が連なっているから、冬は雪も降って、想像を絶する寒さがやってくる。また、アラビア半島を中心に、乾燥地帯が多い内陸は非常に暑いのだが、夜は逆に非常に寒く感じるが、湾岸地方や砂漠地帯を除けば若干の四季はあるし、雨も多少降る。砂漠の夜が寒いのは、夜は太陽が出ないから地面が温められないので「放射冷却」が進み、どんどん熱が逃げていくからだが、そこで日中の暑さに比例して夜は寒くなるわけである。

ここに降る雨は時として信じられないほど激しく降ることがあるが、そのような場所は一般的に表土が薄く、一旦降った豪雨は簡単には地面に吸収されないで、柔らかい地面を探りながら土を抉り、大きな轟音を立てて土石流となって、周辺一帯を物凄い勢いで蛇行し、やがて砂漠の中に消えて行く。濁流が去った後は、深い窪みがあたかも大蛇の爪痕のような痕跡を残して、乾燥した元の土漠に戻る。この窪みを「ワディ」と呼んでいる。砂嵐を避けるため、こういった窪みに天幕を張る羊飼いや、ときどき濁流の犠牲になることがある。また、何ら遮蔽物の無い砂漠に吹く風は、細かな砂粒を巻き込んで叩きつけるように激しく吹くが、これが砂漠の多い地方特有の砂嵐である。地域によりハムシーンとかシロッコ、あるいはアジャージなどと呼ぶが、ハムシーンとはアラビア語で50を意味し、50日間続くからとか、年間50回来るからなど語源には諸説があり、砂漠でこれに巻き込まれると、砂が非常に細かい場所では人間の穴という穴に入り込んで、時には窒息してしまうことさえある。

中東はこのように僅かの部分しか耕作地が存在し得ない。そこで一部の地域を除いては一年中安定した農業は出来ないことから、古くから遊牧の生活がその主流となって来た。

頭に巻いたターバンで砂嵐は防げない

ある友人が、こんなことを言った。「砂漠に行って砂嵐を見てみたいものだ。映画や絵本に出てくるアラブ人が被っている布は、砂漠で砂嵐にあったとき、この布によって防ぐのだろうか？」アラブ人が頭に巻くターバンを砂嵐除けとは恐れ入った。あんな布きれ一枚で砂嵐が防げるわけがない。

ちなみに、ターバンは色によって宗派や家系が区別された時期もあったという。預言者ムハンマドの子孫は緑色のターバンをしていたことから、緑はイスラムの聖なる色となっている。たとえば、リビアの国旗は緑一色である。敬虔なイスラム主義国だから、国旗も聖なる緑色に染めたのである。だいぶ以前の話だが、リビアの指導者カダフィ氏は、アフリカにカダフィ・イズムを植え付けようとして、アフリカ合衆国構想を提唱した。そのプロジェクトを「緑の革命」と称したが、同じ時期、日本政

府のある技術援助機関がフィリピンの稲作支援プロジェクトを「緑の革命」と命名して、失笑をかったものだった。

ターバンの代表的なものは、クーフィーヤという赤白や赤黒などの市松模様の四角い布を頭に巻き、イカールという黒くて太い輪っかで押さえるスタイルが伝統的な被り物である。地方により、アガールとかスィルクとか呼び方が違うが、イカールという黒い輪っかは、それぞれの頭の形によってはしっかりと乗らない者も出て来るのは仕方のないことで、やはり頭の先端が尖った者の方が座りがいい。

このターバンは、防塵防暑の役割を果たす便利なものだが、ほこり除けや日射し除けにはなるだろうが、このような布きれ一枚では砂嵐は防ぎようがない。ターバンで砂嵐が防げると思っている人は、どうも映画や絵本などで砂嵐にあう場面を見たのかも知れない。しかし、砂嵐は私たちが想像している以上に恐ろしいものである。砂漠に吹く風は、遮蔽物がないから非常に強烈で、猛烈な台風に遭遇するようなものである。空中を飛ぶ細かい砂によって周りがオレンジ色になり一寸先が見えないようになる。大きな砂丘が一晩で移動するくらい激しい。高温に熱しられた砂粒は、目といわず口といわず身体の穴という穴に入り込んできて、下手をすると窒息死するというから台風より恐ろしい。しかも、この砂嵐は通常は数日間続く。本当のことを言えば、雲竹斎はいわゆる細かな砂の砂丘が連なる砂漠において砂嵐に遭遇した経験がない。砂嵐が起きるような場所に住んでいたわけではないし、また、探検隊ではあるまいし、そのような場所に行かなければならないような必然性はなかったからだ。しかし、見聞きしたことをあたかも自分自身が体験したように言わなければ、友人たちは、私の話のすべてを信用しなくなるので、まことにつらいものがある。

また、中東・アラブといえば、広大な砂丘が連なる場所しか浮かばない友人たちも多い。彼らの脳味噌では、近代的なビルが林立する巨大な都市は想像できないらしい。まったく中東諸国をバカにしているのだが、都会でも年に何回か砂嵐の余波が押し寄せてくる。これをアジャージ、北アフリカではシロッコ、あるいはエジプトではハムシーンなどと呼ぶが、これが来ると猛烈な暑さに襲われる。ベッドのシーツは燃えるような暑さになり、都会でも毎年死者が何人も出る。また、家の中に細かい砂が入り込むから、一日に何度も掃除をしなければならない。住宅の隙間から砂が入り込むのは、それだけ砂が細かいからである。砂漠ではその砂に車も人も一緒に生き埋めにされてしまうことだってある。こういった話は、ふだん日本ではお目にかからないから、友人たちに信じさせるのがたいへんに難しい。西アフリカのセネガル、マリ、ニジェールなどのサヘル(サハラ砂漠の周辺)に行くと、砂に埋まりそうになっている多くの家屋を見れば、きっと彼らも納得するに違いない。毎日のように吹きつけてくる砂漠の砂は、たとえかき出したところできりが無い。そのうち周囲の砂が家より高くなって、崩れて押しつぶされる。豪雪地帯の冬と同じだ。違うのは、雪は解けて消えるが砂は溶けないことである。

砂漠では、地表に現れている岩が日中の高温や夜間の極端な温度変化によって自然に砕かれて小さな礫になる。強い風が吹けば、その礫が空中に舞い上がり、礫同士がぶつかり合って研磨され、それが繰り返されて、しだいに小麦粉のような細かい粒子になっていく。これは海岸の砂が波に揉まれて砂同士がぶつかり合い細くなるのと同じことだが、粉のように細くなれば海水に洗い流され、水に溶け込んでしまうから目にすることができない。しかし、砂漠の砂は空中に舞って移動しているから、澄み切った青空のようだが、飛行機を飛ばすと風防ガラスに細かな砂がつくから実際に見ることができる。

こういった砂漠には、「砂漠のバラ」という奇妙なものが存在する。もちろん本物のバラの花ではない。直径が数センチから十数センチのバラの花に似た形をした岩石である。これが重なり合って巨大な岩石になっているものが多い。これは土中の雲母とか石英などの鉱物が、温度と圧力の関係で気の遠くなるような年月をかけて固まったものである。これを、ラクダの糞やラクダが小便をして固まった砂が長い年月の間に熱い直射日光が当たって出来たものだ、と冗談を言っても信用する人がいる。高校の教師をしていた友人はこの話を真に受けて、授業で得々と喋っていたらしい。今さら「あれは冗談だ」と言えば殴られるから黙っているが、彼の顔を見るたびに、笑いたくなるのをこ

らえるのが苦しい。